

「見徳一炊夢」について

江崎 怜子

目次

序

第一章 喜三二と春町の交友

第二節 「見徳一炊夢」と「金々先生栄花夢」

第一節 「金々先生栄花夢」と「邯鄲」・「辰巳之園」について

第二節 「見徳一炊夢」と「金々先生栄花夢」について

いて

第三章 「見徳一炊夢」と「高漫齋行脚日記」

結論

序

黄表紙とは、江戸時代草双紙と呼ばれた一連の文学の一時期の呼び名であり、赤本・黒本の系統を引き、次に合巻へと発展していった江戸根生いの小説である。一般には安永四年恋川春町画作「金々先生栄花夢」から文化三年蹄齋北馬作「虚気早替三」までの約二十二年間の作品をいう。

ここでは、黄表紙作品としては比較的初期のものに属する喜三二作「見徳一炊夢」を取り上げ、黄表紙第一作として知られる春町の

「金々先生栄花夢」から如何なる影響を受けているかを中心にして、喜三二が「見徳一炊夢」に描いた世界をとらえていきたいと思う。それに際して、「金々先生栄花夢」の成立に関係の深い謡曲「邯鄲」、洒落本「辰巳之園」について、又春町画作「高漫齋行脚日記」とは何ら影響関係は認められぬかどうか考察を加える。

第一章 喜三二と春町の交友

喜三二は秋田佐竹藩二十万五千八百石の江戸留守居役の武士であった。本名を平沢常富、通称平格（平角）といい、後、剃髪して平荷と改めた。亀山人、齡山人などとも称し、狂歌名を浅黄裏成（後に手柄岡持）、俳名を雨後庵月成、狂詩では韓長令と号した。他に天寿、道蛇桜麻阿、虎耳窟、明誠堂等の号を持っている。享保二十年（一七二五）に生まれ、幼い時から父の影響で芝居を見たり、俳諧を習ったり、鼓の稽古をしたりした。文筆活動は三十二才の時、「吉原細見」の序文を書いたのを手初めに、「細見とまり舟」「和歌三鳥に」等に執筆し、黄表紙、滑稽本、狂歌集、随筆にと彼の大通振りを發揮しながら、その多才さを見せた。天明八年（一七八八）「文武二道萬石通」を著わして、主命によって戯作の筆を絶たれて後は狂歌・狂文を専らにした。文化十年（一八一三）に七十九才で没したが、その辞世「死にたうて死ぬにはあらねどお年には御

不足なしと人やいふらん」は人を思わず苦笑させるものであるが、彼が最後まで狂歌的態度を捨てなかつた事をよく示している。

一方春町は一万石の駿河小島藩主松平丹後守の用人で、江戸小石川春日町に住まいしたところから恋川春町と号した。別号を寿山人ともいい、本名は倉橋格、通称寿平といった。狂歌号は酒上不埒を称する。画を鳥石燕に学んだ。延享元年（一七四四）に生まれ、寛政元年（一七八九）四十六才で没するまで、安永・天明期を中心に二十余部の黄表紙作品を遺しており、「金々先生栄花夢」によって確立された黄表紙の開祖としての地位は揺ぎないものである。

この喜三二と春町とは私生活においても、戯作者仲間としても親交が深い。喜三二の方が九才年上で何かと面倒を見る事もあつたらしく、春町は喜三二の世話で妻を迎えている。

浮世絵師として名を知られていた春町は、安永二年（一七七三）に喜三二の書いた「当世風俗通」にその風俗の挿絵をかいた。この事が春町が文学にはいるきっかけとなり、その後戯作の上で喜三二と影響しあうことになるのである。そして又、「当世風俗通」の中に表われている「きんきん」の思想にのっとり、当時の流行語「きんきん」をもじった「金々先生栄花夢」を著すことになつたのである。

春町は自己の作品に挿絵をかく一方、他の作家のためにもかいたが、その大部分は喜三二の作品にであつた。喜三二作春町画になる黄表紙は「鼻峯高慢男」「桃太郎後日咄」「親敵討腹鼓」「長生見度記」等があるが、初期の作である「桃太郎後日咄」や「親敵討腹鼓」等に春町がかいている事からも二人の親交の深さが知られるのである。

春町の「金々先生栄花夢」に追隨して喜三二は「見徳一炊夢」を著わし、「楠無益委記」に対しては「長生見度記」をかいている。

又、「高漫齋行脚日記」について、水野稔氏が日本古典文学大系の解説で「喜三二は『鼻峯高慢男』で本作を個人の成長と家庭教育に転じている。」と述べておられる如く、「高漫齋行脚日記」の「鼻峯高慢男」への影響も明らかである。そして逆に喜三二の「文武二道萬石通」に対して春町は「鸚鵡返文武二道」で応えている。春町が新しい草双紙形態の黄表紙を創作すると、喜三二はそれに夢中になり、春町の新しい試みに倣い、その発展に一役買っているのである。「太平記万八講釈」の序に「金々先生栄花夢を見ひらきしよりこのかた、絵草子は大人に処し、通とむだと隆に行はれて、実録世に用ひられず、自ら童蒙を教諭すべき其一端をたつか弓、はる春が罪のみ恋川の深きにあらず、予も又堤を切り雨をふらし、瀬を淵となす罪人なり。」と述べて、黄表紙の発展と確立が、春町一人でなされたのではなく自分もその一人である事を自負し、公言しているのである。

第二章 「見徳一炊夢」と「金々先生栄花夢」

第一節 「金々先生栄花夢」と「邯鄲」・「辰巳之園」について、

喜三二作「見徳一炊の夢を論じる上において、最も重視され、切り離しては考えられないのが春町の「金々先生栄花夢」である。

「金々先生栄花夢」の成立によって「見徳一炊夢」が生まれたともいえるだろう。

そこで「金々先生栄花夢」成立に特に関連の深い謡曲「邯鄲」と酒落本「辰巳之園」の二つを取りあげ、これらが「金々先生栄花夢」の中にとどのように入り入れられているか、又影響を与えているかを見て行き、「見徳一炊夢」と「金々先生栄花夢」とを較べる上での一助としたい。

謡曲「邯鄲」は異称「邯鄲枕」ともいわれている。原拠は唐の李泌の「枕中記」であるが、謡曲の直接の典拠は太平記巻二十五「黄梁夢事」にあるのであろうと考えられている。作者については、能本作者註文には作者不明、二百十番謡曲目録には世阿弥となつてゐる。謡曲「邯鄲」は春町がはじめて用いて書いたのではもちろんなく、「邯鄲」に取材した作品は、青本作家富川房信（吟雪）の「浮世栄花枕」「^{浮世}一盃夢」「風流仙人花簪」などがあり、読者にとつて既に馴染の深いものであった。

又、「辰巳之園」は明和七年（一七七〇）夢中散人寝言先生作の酒落本で、深川の遊里を描き、吉原を描いた「遊子方言」（田舎老人多田爺作）とならんで後の酒落本の展開に大きな役割を果たしたのである。

まず「邯鄲」と「金々先生栄花夢」について見てみると、次のように対比させることができる。

	金々先生栄花夢	邯鄲
時 代	今はむかし	蜀の時代
故 郷	かたいなか	蜀の国の傍
主 人 公	金村屋金兵衛	廬生

旅の目的	目的地	立寄った場所	その理由	夢を見る場所	枕の自覚	夢で迎えられる場所	夢の内容	夢の期間
奉公をかせぎ、世に出て浮世の楽しみをたくさん為	江戸	目黒不動尊	名代の粟餅を食べようとして	あわ餅屋の奥座敷	偶々あった枕を引き寄せてまどろむ	神田八丁堀のいづみ屋（清三のあとと）	栄花の模様を具体的に表わす	三十年 粟餅一臼の内
身の一大事をも尋ねんため	楚国羊飛山	邯鄲の里	ここに泊まろうとして	旅宿	宿の女主人から不思議な枕だと聞いた上で仮寝する	楚国の王宮（帝位につく）	象徴的に表わす	五十年 粟飯一炊間

両作品とも「旅を思い立ち——目指す所の途中で一休み——夢を見る——夢から覚めて人生を悟る」という大きな筋の流れは全く同じである。しかし春町は実に巧みに当世に合うように改作し、江戸町人の栄華の夢を主人公に託して、夢と金とを追わせているのである。

次に「辰巳之園」をみてみよう。これも結局は夢の中の出来事であったとわかるのであるが、誰が見た夢なのか、主人公の志厚なの

か或いは作者なのかは明らかでないし、文中邯鄲の趣向を取り入れたと匂わす所はない。典拠のありそうなことばや人物は登場しない。しかし物語の最後に、

「鳥啼。カアカア。鳥の聲に、目は覚めて、残は枕ばかりなり。邯鄲は五拾年、是は一千日一千夜の楽も、きへて跡なき夢となりにけり。」

という部分がある。邯鄲の夢の古典に取材した作品が多く出ていた當時にすれば、この最後の部分だけで邯鄲の枕の夢を想起させるのには十分であろうし、序の「大阪枕に楽の夢は、廬生が五拾年の夢とやいわむ」「邯鄲と同じ枕や花の夢」とあることから予想されるのである。

春町はこの洒落本をすばやく吸収し、当代の町人の夢を織り込んで「きんきん」の流行語を持つ名前を題につけた。そして彼の繊細な写実的な画風の挿絵と相俟って、「金々先生栄花夢」は大いに人々に受け入れられたのである。

「金々先生栄花夢」が洒落本的要素を色濃く持っている事は、「金々先生」の遊興を遊里に求めているのでも領けるであろう。当時の江戸人の享楽の対象が芝居と遊里であった事を考えれば、極めて当然のことかもしれないが、草双紙においては珍しい試みであった。それにも増して、全篇を流れる半可通的滑稽さは洒落本のそれである。金村屋金兵衛の半可通振りは、「辰巳之園」の如雷の役割である。表現においても、

「金なきものはゆふでく頓直となる。」

「うっちゃっておけ、すゝはきに出よふとといったはこのこったあろう。」

に見られる「ゆふでく」「頓直」「打捨て置け煤掃には出る」等のことばは通言といわれたものであり、他にも流行語として「金々先生」の「きんきん」や「……よしかえ」とことばの最後につけた「よしかえ」などがあり、洒落ことばとして、

「そろばんの玉はづれお、しこたま山と出かけて」

「あしたは北国へいき山とおでかけなさりませ」

「これはありがた山のとんびがらす。これおもって検校になり山と出かけましよう」

といったように「…山」と続けたことばなど、通言・流行語・洒落ことばをいった類のものも数多く見られるのである。これらはいずれも「金々先生栄花夢」が「辰巳之園」から受けた影響が大きかったことを示すものである。

以上見て来たように、注目を集めた「金々先生栄花夢」は、「邯鄲」の趣向を承けて、その構成も殆どそのまま踏襲したとはいえ、人物や場所、内容などを当世風に改作し、表現も適宜「邯鄲」の文章のもじりが見られる。そして、この趣向を用いる発想は「辰巳之園」から示唆されたとも考えられるのであり、「辰巳之園」から受けた洒落本的特質は、主人公の半可通的な滑稽な言動の中に、通言・流行語・洒落ことばなどをふんだんに使った会話のやりとり、又「邯鄲」の趣向を当世の場面に設定創造する上に汲み入れられているのである。

第二節 「見徳一炊夢」と「金々先生栄花夢」について

次に喜三三の「見徳一炊夢」と、喜三三がこの作品を著わす上で追隨した春町の「金々先生栄花夢」を比較しながら、両作品の構

成・登場人物を中心にして、喜三二の「見徳一炊夢」における技巧、心配り等について考察してみよう。

「見徳一炊夢」と「金々先生栄花夢」の構成を見るに、前者には序がないが後者には序がある。序は洒落本ではあるのが普通であったが、黄表紙では一概にどちらとは定まっていなかったようである。本文は両者ともに、大きく次の三部に分つ事ができる。

1、夢を見る迄の経緯

2、夢

3、夢から覚めて後

2の夢の部分で前者は、夢の中で又夢を見るという複雑な構成を取っているが、一応まとめて夢の部分とする事ができる。

「今はむかし、かたいなかに金むらや金兵衛といふ者あり。」という書き出しで始まる「金々先生栄花夢」は、「むかしむかし、あるところに……」といった調子で始まる昔話を連想させる。これからはじまる物語が自己とは全く別の次元において繰広げられる感を読者に与え、その空間的な非現実の世界の中で、その実は当世を描くという趣向である。これは「見徳一炊夢」の書き出し、「むかしくゝの事なれば、うそかもしらねど、浅草茅丁の邊に蘆野屋清右エ門とて、百万両分限とよばれたる大のはらふくれあり。」において一層徹底している。

夢の部分、この部分が最も中心となるのであるが、「金々先生栄花夢」は粟餅の出来るまで、「見徳一炊夢」は蕎麦の出来るまでの夢である。「邯鄲」や「金々先生栄花夢」はどこからが夢なのかはつきり示されているが、「見徳一炊夢」では「浅草の並木に、栄華屋夢次郎とて、邯鄲の枕をかして夢をあきなふもの、このごろ新見

世びらきにて……」から既に清太郎の夢なのであるが、読者にはわからぬ仕組であり、夢商いなどの珍商売を取り入れるなど喜三二の工夫のおもしろさを感じられるのである。

「金々先生栄花夢」では金兵衛一人の夢であったが、「見徳一炊夢」では、清太郎に五十年の栄華の夢を見させる前に、片井国左エ門、喜津井武左エ門、それに国左エ門の若党と草履取の折内の四人に夢を買わせ、それぞれの値段に応じて夢を見させている。

若党は三十式文で一時の夢、船饅頭のいる船へ飛び乗る拍子に海へ落ちて夢は覚め、折内は十六文で芝居一切の夢。国左エ門は四文銭一本をはずんできんとした女郎を買ひ、三つ蒲団の上までこぎつけたが、一文なしの彼「(若い者)『お勤めがなくなば、はやくおかけりなさりませ。たゞあそばせる女郎衆はないのさ。』」と冷たい。これは一日の夢である。

夢の中の金兵衛への遊興は、吉原・深川 品川の各遊里での遊興であるが、「見徳一炊夢」の清太郎は、更に一段と自由奔放さを増し、その行動範囲も広い。そして喜三二は清太郎の栄華の五十年を彼の年令によって区切り、その行動範囲を京都・大阪・長崎と拡げ、ついに唐にまで及ぼしている。長崎で出会った唐人や唐に渡ってからの唐の女のことばに、「金々先生栄花夢」や「辰巳之園」で深川の遊里でとりあげられた唐言を使い、念のいった洒落方をしている。そして、「此ほかさまくゝのおごりあれども、まづ五十年が間の花なり。」「これこの五十年の花なり。」と千両で買った五十年の栄華の夢を強調すべく二度までも繰返しているのである。

「夢さめて、くゝ」と清太郎の夢の中の夢で、更に、「金々先生栄花夢」において述べようとする所は、「序」の「浮世は夢の如し。

敏をなすこといづくぞや」「金あるものは金々先生となり、金なきものはゆふでく頓直となる。」に代表されるが、この「序」のことは、「見徳一炊夢」にもそのまま通じる。つまり両作品に表わされているのは夢と金である。小柴値一氏が「黄表紙と対象の世界」の中で、「庄迫政治の下に置かれ、固定された武士階級の支配を蒙り、且庶民階級は栄達の希望も絶たれ、そして町人生活の不安を感じるときに、こゝに被支配階級が自己を中心にしたユートピアを描かずに居られない。

然し一般社会が描く白昼夢は夢の様なものであり、果敢ないものであった。従つて覚めてしまえば元の姿である。殊に町人の理想といへば、西鶴以来『金』であった。富裕、分限といふものであった。現世では得られない代りに、夢の中にも、一夜でも得たいといふ、町人の理想が描写されているのである。」(国語と国文学)と述べておられるように、金持になり樂しみを尽くしたいという町人の夢を、喜三二と春町は夢に託して黄表紙の世界に描いたのである。

さて、両作品の登場人物の中で、主人公の蘆野屋清太郎と金村屋金兵衛を除いて、特に注目されるのが手代の代次と源四郎である。

「金々先生栄花夢」の手代源四郎をその文中に追ってみると、家督を継いだ後、「いまはあたまも中剃を鬢のあたりまでそり、かみの毛をばねずみの尻尾くらいにして本多にゆい、きものは黒羽二重づくめ、帯はびろうどまたは博多織、風通もうる」と当世の流行を尽くす金兵衛を、

「類は友をもってあつまるならひにて、手代の源四郎、たいこ持の万八、座頭の五市なぞ心をあわせ、こゝを先途とそゝな

しける。」

であり、金々先生ともてはやされる金兵衛を次から次へとそゝのかしていく。

この頃の金兵衛の立ちは「八丈八端の羽織・縞ちりめんの小そで、役者染の下着、亀屋頭布に目ばかりいだし、」である。

源四郎はじめ、取巻の連中が表向きだけでもちやはやしているのは金のあるうちで、金のなくなった金兵衛には振り向きもせず、ついには「生まれつき心優」な金兵衛をそのかし、利用した挙句のはてには追い出してしまうのであり、いふなれば、金兵衛の運命はこの源四郎によって左右されている。

一方、「見徳一炊夢」の手代代次は、夢中の人物ではなく、「清太郎と同じ年にて、子どもの時から発明なうまれつきにて、清太郎としごくむつまじく、つねづね憂さをも話し合う」清太郎と同次元の人物であり、主人に対しては至って忠義者である。夢の中に登場させてはいるものの、清太郎の五十年の諸々の遊芸遊興の部分には一切登場しない。この事は金兵衛の取巻にそゝのかされる主体性のなさと対照して、清太郎自身を浮き上がらせる事にその効果を狙い成功しているといえる。

以上のように「金々先生栄花夢」と「見徳一炊夢」とでは、手代の取り扱ひ上に大きな違いを見せているのである。前者では夢中の人物でありどちらかといえば悪人である。しかし後者では夢に登場させても実在の人物であり主人に忠実である。この手代に相当する登場人物を「邯鄲」に求めようとすれば、蘆生が王宮に迎えられ、天の濃漿の盃を受ける場面における侍臣が一応考えられなくもないが、やはり困難である。進主人公ともいふべき位置に手代をおさめ

た事は、春町の創作力といえよう。更に喜三二は春町を承けたとはいえ、春町の手代とは性格や役割を異にする手代を登場させ、その事によって、「浮世は夢の如し。敏をなすこといくばくぞや」を強く打ち出している。

「見徳一炊夢」は趣向を「金々先生栄花夢」に承けて、夢と金とを取りあげ、夢の中の出来事という無責任な場面設定のもとに、金持になり楽しむをきわめてみたいという町人の夢を織り込み、読者に主人公と一緒にほかない栄華の夢を見させ、或る満足感を味あわせたのである。そして細かい配慮によってもっともらしく夢と金とを強調して、読者の要求に応えようとしたのである。

第三章 「見徳一炊夢」と「高漫齋行脚日記」

次に「見徳一炊夢」と、恋川春町画作で安永五年（一七七六）に出版された「高漫齋行脚日記」とについて、両作品間に如何なる関係或いは影響が認められるかを見て行きたい。この「高漫齋行脚日記」は、前に述べた「金々先生栄花夢」の翌年の発行であり、喜三二の「見徳一炊夢」創作に際して疑いなく彼の意識下にあったと思われるのである。

ここで私は、「見徳一炊夢」の清太郎の放蕩振りと「高漫齋行脚日記」の天狗にしげこまれた者たちの行動を思い合わせてみると面白いと思うのである。

まず「高漫齋行脚日記」を見ると、法外は俳諧師範萬屋の高弟という設定であり、村田自休は茶の宗匠である。この二人は金もうけの手段として、俳諧・茶・花等を利用し、法外・自休と同じく天狗にしげこまれた者たちは諸々の遊興にふける。

一方「見徳一炊夢」における清太郎も又、自分の気の向くままに江戸狂言を、大坂で見たり、名筆の書画をあつめ、書画のあとには、俳名を芦清とつけて俳諧をやり、素人狂言に熱中し、能を催す。果ては茶の湯に凝りるといった具合である。

「金々先生栄花夢」において、金兵衛が奢りを尽くし、楽しみを極めようとするのは、遊女通いに代表されていたのに対して、その遊びは単に遊里のみにとどまっておらず、俳諧・書画・狂言・乱舞・茶等にひろがっているのである。この所は、喜三二が巧みに当世を取り入れた所でもあり、「見徳一炊夢」が「高漫齋行脚日記」からの影響を受けたところであると考えられるのではなからうか。更に他にも、「見徳一炊夢」で、金にあかして書画をはじめ名筆の書画を集め、芝居ではその衣裳に凝り、茶をすれば高価な茶道具を集める方に一生懸命である、このところは「高漫齋行脚日記」の、生花をすれば生花そのものではなく、名のある花器や季節はずれの花を珍重して高い金をかけ、蹴鞠をしてはうまくならないうちから、その衣裳に金銀を費す、という所と同じである。

又、「見徳一炊夢」にしても「高漫齋行脚日記」にしても、すべて金にあかせての遊興である。清太郎は会計役までも引き連れて、出費は印を捺すだけ、金を使い放題に使って終に百万両の借金をつくるのである。「高漫齋行脚日記」の山川白左衛門・相生松之介・麥手古庵らは、遊里で遊ぶ金に事欠いて、景都・清都という、勾当の弟子から三百両の金を借りた。そして金の返却日になり、しばしば催促されても返せないで、訴えられ、大小衣類を取り上げられて追い払われてしまうのであるが、この場面の佛を「見徳一炊夢」の次の部分に見ることができる。即ち、清太郎の百万両の借金を取り立

てに、手代の代次の代になった蘆野屋へ債主がやって来る。偶偶そこに帰り合わせた清太郎は、百万両の身代をたたくで代次と共に出家するのである。

両作品とも、額の多少の相違はあるにしろ、贅を尽くした遊興の末に借金が残り、取り立てられて、それまでとは違った境遇に陥る事にかわりはない。

以上のように、「見徳一炊夢」において、「高漫齋行脚日記」からの影響も、清太郎の遊蕩振りの中に或いはまた借金をもって来た所に、はっきりと認められるのであり、その中に、諷刺的な方向を持つといわれる「高漫齋行脚日記」からの流れを感じる事ができるのである。そしてこの作品からの影響が「見徳一炊夢」をより複雑な、奥行きのある面白い作品としているのである。

結 論

「金々先生栄花夢」は、一炊のまどろみの内に人生の楽しみを尽くし、夢から覚めた後悟りを開くという「邯鄲」に拠っているが、蘆生の求道心を町人の金を求める心に置き換え、全体の構想を当世に置き換えて、現実を戯画化したのであり、「辰巳之園」から、主人公の半可通的な言動の滑稽さや、「金々先生栄花夢」の説明書きの中にも、その洒落本的気分を取り入れている。一方「見徳一炊夢」も又、「金々先生栄花夢」と同じく直接、間接に「邯鄲」「辰巳之園」から影響を受けているのである。

次に「見徳一炊夢」における「金々先生栄花夢」の影響を見るに
1、夢と金を、即ち通人として金にあかせての遊里耽溺という町人の夢を、その根底に描いているという事。

2、この夢と金を描くために、邯鄲の夢の趣向を借りた事。
3、主人公は願いを叶えられるが、終始、半可通的な滑稽を伴って描かれている事。

4、「邯鄲」には登場しない手代を、準主人公的位置に取り扱っている事。

以上右にあげた四点を指摘することができる。なお其の上、喜三二に一見何気ない中に彼の細かい計算と配慮とを次の如く見せている。

1、夢の中の夢という二重設定によって、構成を複雑にすると共に、内容の奔放さを増している。

2、楽しみを極めるのを遊里のみに限らず、諸国、諸芸に求めている。

3、夢と金を強調するために、

1、「金々先生栄花夢」とは異なった手代の取り扱いをしていく。

ロ、「金々先生栄花夢」では、主人公は次第に衰えて行くのに対し、奢りを尽くした後の代償として思いもかけぬ多額の借金を取り立てさせている。

という如くである。

そして更に、右に挙げた、喜三二の配慮の中で(2)と(3)の(ロ)に該当する部分は、その内容を「高漫齋行脚日記」から影響を受けて、書かれたと思われるのであり、主人公の放蕩の中に、当時の世相が窺われ、「諷刺的な方向をとることを早くも示した作」としての「高漫齋行脚日記」からの流れを汲んでいるのである。このように「見徳一炊夢」は、「高漫齋行脚日記」からの影響も受けているのであ

る。今までに「見徳一炊夢」は「金々先生栄花夢」からの影響のみが説かれていたが、私は「高漫齋行脚日記」からの影響が多大であ

るといふ事を強調しておきたいと思う。

東国東郡安岐町方言における

あいさつことば

永松一恵

目次

はじめに

一、研究の動機と目的

二、調査

三、調査地概説

本論

第一章 日々のあいさつ（路上の出会い）

第二章 労働のあいさつ

第三章 訪問のあいさつ

第四章 辞去のあいさつ

第五章 物品贈答のあいさつ

第六章 勧めるあいさつ

第七章 特別な行事のあいさつ

第一節 お盆のあいさつ

第二節 結婚のあいさつ

結び

はじめに

一、研究の動機と目的

国東地方は、半島で一地方を形成し、他地区との交流も少なく、大分方言のなかでも独特な形が、数多くみられる。安岐町は、筆者の母の出身地で、現在祖父母が健在で、幼い頃からなじみの深い土地である。未知の土地よりは正確な調査が出来るであろうし、熟知の土地よりも新鮮な目が向けられるだろうと判断した。以上の点か